

オンライン研修・テレワークによる 高校キャリア授業考案プロジェクトの実践と報告

福田美誉*1・筒井洋一*2

Email: fukuda@noa-prolab.co.jp

*1: 株式会社ワークアカデミー/一般社団法人 未来教育推進機構

*2: 京都工芸繊維大学

◎Key Words インターンシップ, 高校キャリア教育, オンライン研修

1. はじめに

近年産業界で「働き方改革」の一環とされてきた在宅テレワーク導入の動きが、2020年更に加速している。在宅テレワークを行う社会人及びその職場は、クラウドの活用スキルに加え、打合せ時の会話や合意形成、セキュリティ対策など、総合的な知識とスキルを身に着けることが課題となっている。これは様々な国や地域の人が多様な価値観に触れ、スキルを持ち寄って仕事を行う、柔軟で自律的な働き社会への移行につながる。大学生は社会に出る前に従来の企業内（労働とは異なる、新しい社会に対応した学びの機会が必要ではないか、と考えられる。

本研究は、大学生を対象としたプレインターンシップ型プロジェクト学習プログラム（以下プレインターンシップ型PBLと略）の構築を最終目標とし、そのための実践と検証を目的としている。実施に当たっては、人生100年時代の社会人基礎力⁽¹⁾全般の向上に加え、(1)多様な価値観の理解と協働コミュニケーション、(2)テレワークに必要な情報活用力の定着、(3)学校から仕事社会への考え方の移行、(4)社会人基礎力のメタ認知の向上の4つの重要学習方針を設けている。2020年春季にはこの4つの方針を継続しつつ、テレワークを全面的に導入した「高校キャリア授業考案」プロジェクト（以後、高校キャリア授業考案PBLと略）を実施した。本稿ではこのプロジェクトの実施内容とその分析、考察結果について報告する。

2. UMEDAI インターンシップについて

「UMEDAI インターンシップ」は、(一社)未来教育推進機構(UMEDAI)が主催し、(株)ワークアカデミーを始めとする複数企業が参画しているプレインターンシップ型PBLである。これは2018年度にワークアカデミー社が受託した行政案件の中で行った女性活躍推進企業取材・冊子制作プロジェクトの実績をもとに、シリーズ化したものである。今日まで、実践検証を重ねながらカリキュラムや環境、評価体系、運営などにおいて、質の向上と内容の充実度を図っている。これまでの実施状況を表1に示す。

表1 プレインターンシップ型PBLの過去の実施状況

実施テーマ	開催期間	受講者数
女性活躍推進企業の取材と紹介冊子制作	2018年度下期 6か月間	10大学 から26名
スポーツ用品店のIoTを活用した企画立案	2019年度上期 3か月間	8校・2企業 から13名
新しい時代のリクルートスーツ考案	2019年度夏季 3週間	11校 から13名

3. 実施中の社会変化と計画の変更

「高校キャリア授業考案」プロジェクトは、5週間のグループ活動の中でチャットツールによるテレワーク活動を取り入れる一方、4回の全体研修と高校への取材訪問、考案発表リハーサルは直接集合しての実施を計画していた。ところが、2020年2月22日の初回研修以降、政府から新型コロナウイルス感染対策に関する各種自粛要請が出されたため、参加学生の安全性等を考慮し、研修、取材を含め全ての活動をオンライン形式に切り替えた。

4. 高校キャリア授業考案PBLについて

4.1 テーマについて

UMEDAI インターンシップの活動テーマは、学生が動機、意欲をもって主体的に取り組めるよう、「社会課題解決型」「学生が興味持ちイメージできる」という2つの方針を踏まえ、大学生の意見も参考にしつつUMEDAI事務局スタッフが決定している。今回のテーマ「高校キャリア授業考案」もその方針で決定した。結果、従来の企業内インターンシップにはない“高校”を対象とすることとなったが、職場体験学習であることを踏まえ、企業人とキャリアデザインについて検討する研修も盛り込み、多様な社会人に出会う機会を設けた。これは授業考案の発想のヒントになることも意図していた。また、総合的な社会人基礎力が向上できるようプログラムの全体構成を考えた。

4.2 実施概要と方法

開催期間5週間の活動概要を表2に示す。初回研修及び最初の京都市内の私立女子高校の訪問取材以外の集団活動は、完全オンライン形式または会議室とオンラインを併用しての分散型形式で行った。前半2週間の班活動と後半3週間のチーム活動は、全てオンラインでの検討とクラウドツールを活用しての作業により継続した。

前半の班活動は、キャリア探究班とキャリア教育調査班に分かれ実施した。これは取材を通じてステークホルダーである高校教員、高校生の現状や思いを知ること、授業考案を開始する前に必要な情報を収集、整理すること、そして考案者である自分たちのキャリアデザインに対する考え方などを深めておくことを意図とし、設けた。

後半のチーム活動については、3週間の考案活動の中で1週間ごとにスケジュールのマイルストーンを設けた。第1週は企画立案、第2週はカリキュラムの提出を切を設定し、第3週は事務局スタッフと日程調整して発表リハーサルを行い、それぞれのチームの進行に遅れが出ないようにした。

表2 高校キャリア授業考案PBLの実施概要

実施期間	2020年2月22日～2020年3月28日	
参加学生数	10大学から大学2～4年生13名が参加	
全体研修内容 (終日開催)	初回	UMEDAI 学生事務局提供デモ授業体験
	2月22日	活動キックオフ
	第2回	<企業人と交流会>
	2月29日	職業人生やキャリアを深掘するグループワークを実施
	第3回	前半班活動結果報告
前半班活動	3月7日	後半チーム企画立案グループワーク
	最終回	前半:授業考案発表会, 午後:振り返り
	3月28日	社会人6名, 教員11名, 高校生1名見学参加
	キャリア探究班	若者のキャリアの課題を検討し整理し発表資料を作成
	キャリア教育調査班	高校キャリア授業の現状と課題を調査し発表資料を作成
後半チーム活動	高校取材 (2班共通)	訪問取材 京都市内 私立女子高校 教員2名, 生徒8名 オンライン取材3回実施 ・大阪市内 私立女子高校 教員1名 ・京都市内 私立共学高校 教員3名 ・複数校高校生同時取材 4名
	3チーム 各4～5名	第1週:企画立案 第2週:カリキュラム・教材制作 第3週:発表準備, リハーサル 各週オンラインでチーム内検討, 各自の作業を遂行

高校取材については, 高等学校も“インターンシップ先の職場の1つ”と位置づけ, 取材準備時, 取材時に以下の点に注意するよう参加学生へ促した。

- インタビュー時は「御校」「貴校」といった呼称を用い, 先生に対しても敬語を用いて対話すること
- インタビューシートは, 企業へ接する時と同様に敬語や文面に注意してまとめること

キャリア授業考案については, 高校並びに教員に採り入れてもらいやすいよう, 90分授業×3コマまでの時間ボリュームを条件として提示したが, 課外活動や教室外授業も含めた幅広い場の授業もありとし, 教員や企業関係者にはない学生ならではの発想で創ることを要望した。

4.3 テレワーク環境

テレワーク環境は同期型と非同期型のツールを組み合わせ用意した。大学卒業後も仕事の場で実践できるよう, ツールは学習管理システム(LMS)ではなく, 社会人向けの業務用クラウドツールを選択した。使用したクラウドサービスを表3に示す。

テレワークは一般的に相手の表情や心の動きがつかみにくく意思疎通がしにくいと考えられているため, これまでのインターンシップの実施方法⁽²⁾と同様に, ツールそれぞれの使い方や仲間との連携, 意思疎通の仕方について, 研修開始時に方針を伝えた。

表3 テレワーク環境として使用したクラウドサービス

形態	サービス名	説明
同期型	Zoom	Web 会議システム 全体研修, 研修内のグループワーク(ブレイクアウト)やチーム内での定期的な検討に使用
	Slack	ビジネスチャット 事務局からの連絡・アドバイスや, 学生の班・チーム活動の推進, 資料確認のやり取りに使用
非同期型	Google ドライブ	ファイル共有, ストレージ 研修資料や学生の班・チーム活動の資料共有に使用
	Google アプリケー ション	資料作成などのために, ドキュメント, スプレッドシート, スライド, フォームを使用

4.4 実施体制

カリキュラム設計と環境構築, 研修当日の運営及びファシリテーションはUMEDAI事務局の社会人スタッフ4名が行った。また, UMEDAI 学生事務局スタッフ2名が初回研修の一部のプログラムを実施し, その後はグループワークに加わった。初対面同士の参加学生の緊張感や気後れを取り除く中間的役割を担った。

5. 高校キャリア授業考案PBL実施結果

5.1 企業人との交流研修について

第2回研修は企業関係者との交流, 対話の機会を設けた。午前は複数業界の社会人を招き, 幼少期から今に至るまでの人生やその過程での気づきについて語って頂いた。午後は企業関係者と学生がグループ対話しながら午前中の話を深め, 1つの絵にして報告する時間を設けた。

実施は新型コロナウイルス感染を踏まえ, 会議室からの参加学生と自宅からの参加学生が集う分散型研修を行った。午前は, 1つの会議室と複数の自宅参加者をつなぎ, Zoom ハイブリッド⁽³⁾と呼ばれるオンライン中継形式で行った。自己紹介と質疑応答は会議室と自宅双方から行った。一方午後は, 会場参加者は3つの小会議室に分かれ, 自宅参加者は会場内の企業人と共にオンラインに集まり, 4グループで対話ワークを行った。最終発表はすべてのグループがオンラインで集まり行った。この研修プログラムは, オンライン参加者と会議室参加者が, 異なる環境で同じ質と内容の対話やグループ活動を行い, その結果を共有しあうことができた新たな事例と考えている。

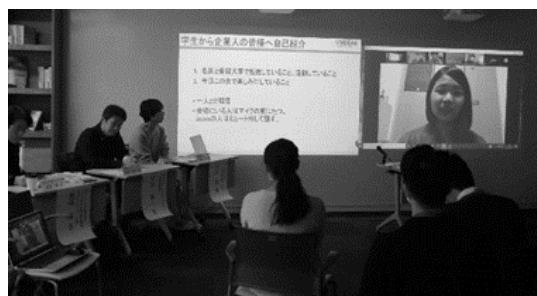


図1 第2回研修 午前の開催の様子

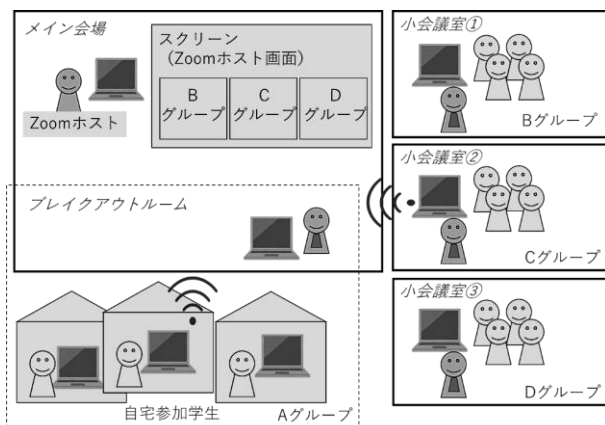


図2 第2回研修 午後の実施形態

5.2 テレワークによるチーム活動

後半のチーム活動は、非同期型ツールを用いテレワークで作業を行ったが、今回はZoomによるオンライン打合せも全面的に取り入れて行った。メンバー間のスケジュールの不一致や不用意な遠慮によるコミュニケーションの停滞などの理由で、打ち合わせが思うように進まないチームがあった。途中UMEDAI事務局の社会人スタッフがオンラインでアドバイスや励ましを行ったことで、活動は軌道に乗ることができた。

一方、あるチームは「頻繁にオンラインで集まって、出席者でその場で仮決定し作業に取り掛かる。欠席者にはチャットで伝えてお互いにフォローしあう。」というチーム内のルールを自ら決めた。自分たちに合った独自のやり方を決めたことで、多忙な学生生活と両立させながら、最後の発表準備まで主体的に進めることができたようであった。

5.3 最終考案発表会について

全体研修の最終回は、オンライン形式で開催された。各チーム持ち時間60分の中で、自己紹介の後、全員が発表し、その後の質疑応答時間で見学者と意見交換をした。スライドやカリキュラムシートを提示しての説明だけでなく、動画による授業イメージの公開やリモート寸劇など、オンライン環境を制約ととらえず、むしろその良さを活かした方法で発表をしていた。見学者から質疑応答で頂いたコメントの一部を以下に示す。

- 高校生は、高校卒業後の過ごし方のイメージが伝わって、大学生と話をするだけでも生徒にとっては刺激的なものだと思う。(高校教員)
- 他校の生徒と交流し高校生同士のナマの声が聞けるのは貴重なことだが、初対面同士でリアルな会話ができるのが難しい。(授業の)工夫があれば教えてほしい。(大学・高校教員)
- (新型コロナウイルス感染対策で)勤務先で在宅勤務が始まり、さらに延長されることになった。今回の活動は新しい仕事の仕方、最先端のやり方を身に付けられた良い経験だったと思う。(企業関係者)

6. PBL 実施結果の分析

6.1 評価と分析の方法

UMEDAI では、学生自ら社会人基礎力に対する課題感や到達度への認識をもち、様々な活動の定点で振り返る機会を設けるよう、自己評価ルーブリックを独自開発し、UMEDAI インターンシップで学生自身によるパフォーマンス評価を実践している⁽²⁾。このルーブリックは、3:いつもよくできている、2:ややできている、1:ほとんどできない、の3段階評価に加え、その数値に対する根拠や振り返り結果に対する自分の今の想い・考えを記入する欄がある。また、UMEDAI 学生からの意見を踏まえ、カリキュラム開発者が作成した判断行動基準例を提示し、仕事経験のない学生でも、これまでの学業・活動に基づいて判断できる仕組みを設けている(本稿ではその詳細は割愛する)。今回は、5週間という短期PBLであったため、全体研修の初回と最終で自己評価を行った。

評価の根拠コメント及び自身の活動振り返りに対する記述結果については、最初に計量テキスト分析の手法を用いて頻出用語とその出現数を求め、要約された量的データから傾向を見出した後、学生各自の記述そのもの(素データ)に目を通した。計量テキスト分析は、近年多くの研究の文章型データの分析に採用されているKHCoder⁽⁴⁾を用い、その分析手順の段階1を実施した⁽⁵⁾。分析結果で、“Google”と“ドライブ”、“就”と“活”は別の用語として抽出されたが、いずれも“Google ドライブ”、“就活”という1つの用語で記述されていたため、単独の用語として取り扱った。

加えて、今回のカリキュラムが彼らのこれからの活動の役に立ち、オンライン上でも活動意欲や動機が続いていたのかを調査するため、事後アンケートの中で満足度調査に加え、「今回のセミナーはご自身の学業や仕事、職業人生などに役立ちそうですか?」、「本プログラムでよく学べた点を記入してください。」の2つの質問を行い、5段階評価及びその理由を自由記述形式で求めた。自己評価、アンケート共にWebアンケート形式で実施した。

6.2 分析結果

自己評価ルーブリックは、初回11名、最終10名から有効回答を得た。表4は最終自己評価の3段階評価の数値結果である。初回より最終で自己評価平均値が上がったのは、*のついている6項目であった。

オンラインという環境下で最後まで1名も脱落せず、全てのチームが考案発表まで達成でき、本プログラムに参加してよかったというコメントを寄せた学生も多数いた上でこのような結果となったのは、自らの足りないものを自覚し、さらに向上させたいスキルや能力がはっきりした学生が多かったからではないか、と考えられる。

評価値が上がった項目に、「パソコン・IT機器操作」が含まれたことは必然的であったが、「働きかけ・貢献」や、「企画立案」、「協働」カテゴリの複数項目など、グループワークに関する項目が多かったことは特徴的である。オンラインであっても、班・チーム活動の中で、他者とのかわりを通じて必要な力を高めることができた、と実感した学生が多かったようである。

表4 ループリック 16 項目と最終自己評価

分類	自己評価項目	最終自己評価値 回答数(N=10)※		
		3	2	1
意欲・ 態度	自己認識・主体性	5	2	3
	* 働きかけ・貢献	4	4	2
	実行・達成	5	4	1
思考・ 判断	情報活用	3	6	1
	課題発見・解決	2	4	4
	* 企画立案	4	3	3
コミュニ ケーション	発言・説明	3	6	1
	傾聴	4	5	1
	プレゼンテーション	2	2	6
協働	ルール・規律	5	3	2
	状況・感情把握	3	4	3
	* 柔軟性・変化適応	5	5	0
	* 感情・ストレスコントロール	6	2	2
	* 多様性理解・コラボレーション	9	0	1
知識・スキル	* パソコン・IT 機器操作	9	1	0
	ビジネスマン・接客	0	8	2

※参加者 13 名中 10 名から有効回答あり

次に、文章の計量テキスト分析の結果について示す。抽出語数は初回 2,919、最終 4,232、異なり単語数は初回 597、最終 723 であった。初回自己評価には見受けられず、最終自己評価で出現し、頻出した用語とその出現回数を表 5 にまとめた。活動で使ったツールに関する用語が多くある一方で、グループワークに関するものやこの活動を仕事として受け止めているものも多くみられた。

表 5 最終自己評価記入コメントで出現・頻出した用語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
Zoom	19	スライド	6
チーム	16	スケジュール	5
メンバー	13	リーダー	5
仕事	11	引き受ける	5
経験	10	反省	5
ミーティング	7	Google ドライブ	4
資料	6	アドバイス	4
オンライン	6	モチベーション	4

実際の文面においても、テレワークツールの操作スキルそのものに関する記述よりも、スケジュール調整やチームワークに関するコメントが多くみられた。

実際の記入の例を以下に示す。(誤植を一部訂正している)

- Zoom 会議の準備や、作らないといけないものを、期限を守って用意できた。なかなか自分から発言はできなかったが、メンバーから話しかけてくれ、話をすることができた。(2 年生, 女性, 動画コンテンツ制作)
- インタビューやファシリテーションがもっと上手になりたいと思った。(2 年生, 男性, オンライン取材に参加)

- 自分が行動を起こせば何か進められることはある。就活でも、社会人になっても、何事も主体性を持って取り組みればモチベーションを上げていけるし、責任感も生まれると実感した。(3 年生, 女性, カリキュラム制作)

最後に事後アンケートの結果を提示する。有効回答数は参加学生 13 名中 12 名であった。「今回のセミナーはご自身の学業や仕事、職業人生などに役立ちそうですか？」については、評価 5 が 9 名、評価 4 が 3 名という結果で、これからの就活やその後の社会人生活につながる活動と認識したことが分かった。「本プログラムで良く学べた点」についての結果を図 3 に示す。IT スキル・テレワークと同数でチームワークが多い一方、ビジネスマン・接客については、急なオンライン化により、実践の機会が乏しかったことが最終自己評価においても数値に影響した。

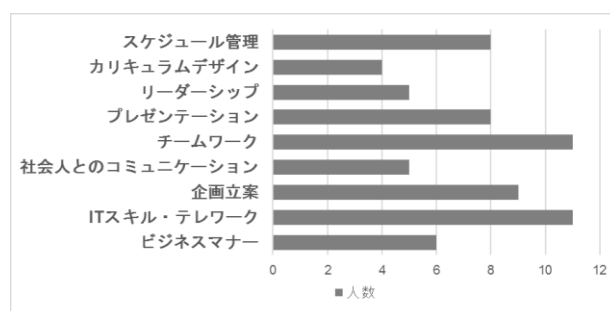


図 3 本プログラムで学べた点への回答数 (複数回答可)

7. おわりに

今回の高校キャリア授業考案 PBL では、冒頭述べた(1)~(4)の重要学習方針の全てで成果があったが、特に(1)多様な価値観の理解と協働コミュニケーション、(2)テレワークに必要な情報活用力の定着について効果的であったことが確認できた。また、企業ではない高校というテーマ・対象であっても、学生は社会人になる前に必要なスキルを身に付け、就業前に必要な課題を明確にすることができた。

引き続き質の向上とテーマラインナップの拡充、内容の充実度を目指しつつ、働き方改革の流れを意識し、就職活動、就業の新しい動きにつながる学習プログラムへと発展させていきたい。

参考文献

- (1) 経済産業省：“人生 100 年時代の社会人基礎力について”，<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>，(2020 年 6 月 4 日)。
- (2) 福田美誉，松田正浩，本田直也：“複数大学生・企業参加によるプレインターンシップ型学習活動の実践と考察”，日本キャリア教育学会第 41 回研究大会発表論文集，pp38-39 (2019)。
- (3) 筒井洋一：“リアルとオンラインとの双方向通信を可能にする Zoom 中継の変遷と発展”，2019 PC カンファレンス論文集，pp. 27-28 (2019)。
- (4) KHCoder，<https://khcoder.net/> (2020 年 6 月 4 日)。
- (5) 樋口耕一，“社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して”，ナカニシヤ出版 (2014)。